

コラム

「いとしのケリー」

MOIRCSはすばる望遠鏡で初めて、インハウスで開発された装置だった。大学の1研究室に属する大学院生たちがハワイに移住し、ハワイ観測所に属する多くの技術者と一緒に開発を進め完成させた、手作りの装置である。そう紹介されてきた。

しかし、MOIRCSプロジェクトの中でもひととき重要な貢献をしながら、ほとんど歴史の表に現れない1人のエンジニアがいる。それが、Kerry Martin氏である。

KerryはMOIRCSの最初のPIである、ハワイ観測所の西村徹郎氏と一緒に働いてきた、いわゆる「流しのエンジニア」である。世界に1つしかない装置を、その仕様を元に常に装置に改良を加えながら開発を進めて行くというタイプの「プロトタイプエンジニア」である。世の中には包丁一本持って一流料亭を渡り歩く料理のプロがいると聞いたことがあるが、エンジニアの世界にも、そういう風に自分の腕とアイデアだけで世界を股にかけ活躍する人々がいるという事を、私は初めて知った。

MOIRCSのメカニズムのいたるところに、彼のアイデアが投入されている。例えばMOIRCSの基本メカニズムであるMOS機構の駆動系・マスクデューワーの基本デザイン（カルッセル）・焦点面のMOS板保持システム・デューワーのたわみを効果的に抑える「デルタ・ウィング」構造など。「みんなでよってたかってアイデアを練った」MOIRCS開発現場であるが、そういうプロからのインプットも大変重要であった事が分かる。

Kerryは変わった男で、すばる望遠鏡が完成する頃ふらりとヒロオフィスに小箱抱えてやってきたそうである。その対応に出たのが西村さんであった。彼はその小箱に入った、彼の手によるセスナ用航空写真撮影装置を西村さんに見せた。その装

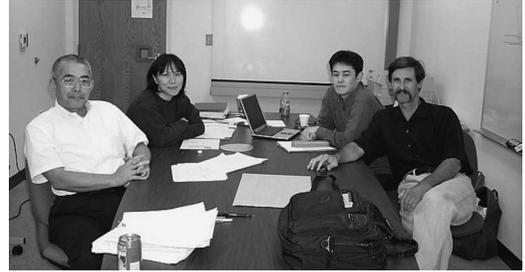


図1 2000年11月のMOIRCS会議。右からKerry Martin, 鈴木竜二, 東谷千比呂, 西村徹郎。

置の完成度を見て、西村さんは直感的に「この男は使える」と感じたそうである。

彼はヒロから1時間以上離れた、ハワイ島の北端のHawiという村に小さなガレージを構えていた。そこで何をしていたのかよくは知られていない。ハワイに来る前にはメイランドの軍関係の工場に出入りしていた、という事位しか、彼の経歴は知られていない。謎のエンジニアである。

こういう人を使える様になるには、信頼関係が非常に重要である。Kerryと西村さんは、何か仕事があるとまずごによごによと電話でやり取りし、図面が送られてきて、またごによごによとやっている。そのうち観測所に乗り込んできて、黙々と作っている。そうこうしてるうちに、MOIRCSアップグレードのための巨大な焦点面機構ができあがってしまった。その「ごによごによ」からモノが出来上がっていく過程を見ながら、研究者のアイデアを汲み取って具体的な形にする「できるエンジニア」のすごさを思い知ったものである。

西村さんは2014年にハワイ観測所の第一線から退いた。その後しばらくして、Kerryもまた、自分もすばるから手を引くと宣言し去ってしまった。

ちなみに、契約で仕事をしてきたため、MOIRCS関係の論文では彼の名前は見えない。ビルダーでもない。彼は2002年のSPIE論文の中で、わずかに謝辞に残るだけである。

(ハワイ観測所 田中孝)